

---

# 春化粧

徳山 ノガタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春化粧

### 【NZコード】

N9017D

### 【作者名】

徳山 ノガタ

### 【あらすじ】

電車に乗る二人の男女。その目的は、女 羽篠紫の憧れる「先生」に会うこと。桜の咲く季節にだけ現れる謎の「先生」と、少女・紫の初恋の物語。企画小説出展作品。

「 ゆかりさん、聞いてます?」

「え? .....ええ、もつすぐですね」

本当は、何も聞いていなかつたけれど。カタン、カタン、と電車の走る音だけが、ぼんやりと耳に響いていた。

「まつたく、3回目ですよ? 一体何を考えていたんです?」

隣に座っている男が呆れた表情を浮かべる。

「さあ? 何かしらね?」

私 羽篠 紫はいたずらっぽく笑つて見せた。

「 .....いい加減、ハツキリさせてくれさいよ。どうして何時間も電車に揺られて、こんな山奥までやつてこなくちゃならないのかを」

男は20代。顔つきはまだ子どもっぽいのに、無理に大人ぶつていふところがこじらしい。私はちょっと考えて、決心した。

「いいわ。教えてあげる。そもそもの発端は、私が小学生のころにあるの」

羽篠家と言えば、いわゆる“上流階級”として周囲から認識され

てこました。私はそこの長女として生まれ、育ちました。

子どものときの私は、引っ込み思案で人見知りするタイプだったんで、なかなか友達といつもの出来なくて……。それを気遣つた父が私に家庭教師をつけてくださったの。

「ちょっと待つてください。それとこれと一体どんな関係が……」

「それを話すの。しばらく黙つていて」

「はあ……」

私が小学校4年生の時、春の日でした。その家庭教師の方にお会いしたのは。私は唯一のお友達であるくまのぬいぐるみを抱いて、お父様と会話する先生の姿を覗いていました。

「始めてまして。咲原 弥生です」

年齢は20歳。田地にほんのりと桃色を帯びた着物姿で、背が高くスラッとしていて、芳しい匂いと肌の白いのが印象的でした。……ああ、そうそう。私、最初は先生のことを女性だと思っていたのですけれど、男性のようにも見えましたわ。

「見えました？」

「ああ……結局どちらだったのか。聞かずじまいだったわ」

先生はとても優しくて、おおらかな人でした。当時苦手だった理科や算数を覚えられたのは先生のおかげ。でも、の方から学んだことは学校の勉強だけではなかつたのですよ。

「今日は天気がいいですね。ゆかりさん、この問題が出来たら、ちよつとお外に出てみましようか。……その子も一緒に」

「え……？」

「勉強は、家の中だけでするものではないのですよ」

先にも言つた通り、私はあまり外に出たがらない性格なので家族以外の人と外出するなんてめつたにありませんでした。でも、なぜだか先生になら心を許せました。

3月の下旬。大きな桜の木が立つてゐる公園に、先生は連れて行つてくださいました。

「桜が満開ですね」

「はい」

住宅地の真ん中にありながら、公園には他に人の姿がありませんでした。先生は桜の前に立ち、太い、がつしりとした幹に触れながら話してくれました。

「ゆかりさんは、桜を見るときにどの部分を見ますか？」

「え？」

最初、その質問の意味がわかりませんでした。少し間をおいて、私はおずおずと答えました。

「えっと……花、ですけど……」

「そうですね。桜を見る、といえばみんな桜の花を見ます。けれど

……」

先生はまず桜の花を指差し、次に枝を指して言いました。

「花は、枝についていますね？」

先生の白くて細い指先は、再び幹に触れました。

「枝は幹から生えています。そして、その幹を支えているのは……」

腰を屈めて、地面に手のひらを置きます。私もつられてしゃがみ込み、地面を見つめました。

「根、です。根がなければ、幹も枝もなく、花も咲きません」

「……」

「……でもう一度、私は花を見上げました。

「根は地面に埋まっているため普段は見ることができません。大事なもの、大切なものというものはいつも見えにくいものなのです」

「……はい」

と、返事はしたものの、当時の私にはすぐにその意味が理解できませんでした。けれど、何かとても大事なことを話しているんだな、ということだけはぼんやりと感じていました。

それから、先生は何度か私を外に連れて行ってくださいました。そしてその度に学校では学べない様々なことを教えてくださいました。

……でも、先生と一緒にいられたのはほんのひと月程でした。4月になつてしまはらくが経ち、桜が散り始めたころに先生は来なくなりました。父に聞いてみると、初めからひと月だけの契約だったそうです。なぜひと月だけなのか、その理由は父も知らないそうでした。

「それで、終わりですか？」

「いいえ。もう少し。……翌年、私が5年生のときです。先生に再会したのは」

その年も、春、桜が咲き始める時期に先生はやってきました。そして様々なこと 花の名前、鳥の名前、虫の捕まえ方なんか、教えてくださいました。特に、初めに連れて行ってくださった公園には何度も通いました。もちろん、私はぬいぐるみを抱いて。大きな桜の木を見ながらベンチに座つてお話するのが、私の一番の楽しみでした。

「日本人は桜が好きですね。けれど、春を代表する花は桜だけではありません。例えば梅の花なんかは、桜よりも早く開花するので春の訪れを真っ先に感じることができます」

「梅の花……ですか」

「ええ」

先生はいつも、こいつと微笑んで話していました。

「あの小さな白い花も、なかなか可愛らしいものですよ」

「はあ。……あまり意識して見た事はないです……。でも」

「でも？」

「桜の花もとってもキレイですよ」

「……フフ。そうですね」

そんなことを話してからついでに、ふと思いついたことがありました。

「先生は、桜の花みたいですね」

なぜそんなことを口走ったのか、自分でもよくわかりません。子ども心にして、なにかしらインスピレーションを感じたのかもしれません。

「……そうですか。桜みたい、ですか」

先生は相変わらず微笑んだまま、口を返しました。

「では、ゆかりさんは？」

「え？」

「ゆかりさんは、『自分の』ことを花に例えると？」

私はちよつと言葉に詰まつて、口を答えました。

「わたしは……梅、かな……」

「まつ。なぜ？」

「だって……先生みたいにキレイじゃないし……その、目立たないし……」

私は学校ではいつも一人でした。

「だから、梅……」

「……そうですか。でも、梅の花はとても可愛らしくですよ。ゆかりさんと同じで」

「え？」

その時、ものすくぐドキッとしたのを覚えています。顔が火照つて、痛いぐらいに胸が高鳴るのを感じました。人に可愛いなんて言わされたのは、初めてでしたから。

「？ どうしました？ ゆかりさん」

顔を真っ赤にしてぬいぐるみを抱きしめる私に、先生はややしく声をかけてくださいました。その時、私は自分の中のある感情に気づきました。それはいつもクラスメイトの女の子たちが話をしていること　誰それが好き、愛おしい、ところの感情……。

ふふ。世間知らずなお嬢様の初恋は、自分よりずっと年上の先生でした。

「え、待ってくださいよ。やつせ先生は男だか女だかわからなかつたつて……」

「ええ。けれど、そんなことも気にならないぐらいい、私は先生に夢中になりましたわ」

バラ色の日々、ところのでしょうね。今思い返しても、あの頃ほど生き生きと輝いていた時期は他にありませんでした。学校から帰ると先生が来るのを今か今かと待ち構えるようになつて、夕方、先生が帰られる時には胸が締め付けられるような思いになりました。

「……知っていますか？ ゆかりさん。この公園、来年には無くなつてしまつのですよ」

「え？ いいえ……」

ある日、こつもの公園で先生はそう仰いました。詳しことはわ

かりませんでしたが、道路を新しく作る為に公園をつぶすのだと  
そんなことでした。

「じゃあ、この桜の木も切られちゃうの……ですか？」

「いいえ。この桜は根本から掘り出しへ、どこか遠くの山に植え変え  
るそうです」

そう話す先生の顔には、深い影がありました。それは先生が始ま  
て「悲しい」という感情を見せた瞬間でした。

「……もひ、おわかれですね」

そう。先生はまた、ひと用だけしか契約をしていなかつたのです。  
私が理由を尋ねても、その答えは返ってきませんでした。

「でも、来年また会えますよね」

私がそういふと、先生は暗い表情のままこいつ仰いました。

「運がよければ……ですね」

「え？」

「工事の予定しだいです」

それっきり、先生はその話をしなくなりました。工事つて、道路  
を作る工事のこと？ 私はいつもその事を考えていましたが結論は  
出ませんでした。

そして、桜の花が散ると同時に先生は来られなくなりました。

「それで、翌年その先生は来たんですか？」

「……翌年の2月、公園の桜がどこか山の中へ植え替えられました。どこか遠く、当時の私の知らない場所へ……」

その報せを聞いたとき、私は本能的に、あるいは女のカンというもので悟りました。「先生はきっと来ないだろう」と……。

お庭の、白い花を付けた梅の木の下で私はぬいぐるみを抱きながらそっと目を瞑りました。白くて可愛らしい花。春の訪れの花。私は梅。先生は桜。けれど桜はもういない。……ああ。

こいつしか、はらはらと涙がこぼれていきました。盛りを過ぎて花を散らしかけた梅の木の下で、遠い桜を想いながら泣いていました。

「それが私の初恋でした。……もう、20年も前の話です」

そこまでも話して、私は腕時計を見る。目的地まであと20分。

「それじゃあ、その……」

男は半ば信じられないところのような表情を私に向ける。

「その先生は、その……桜のせい……」

「そしてこの間、偶然知りました。公園にあつた桜がどこへ移されたのかを。……今向かつてているのはそこです」

「そ、その桜を見に行くんですか？……まさか、そこにいなければ先生に会えるなんて思つてないでしようね？」

「ああ……どうかしらね」

そう言つて私は席を立つ。その背中に、彼が声をかけてくる。

「ゆかりさん、もう一つだけ聞いていいですか？」

「なあに？」

「ゆかりさんは、その……今も、その先生のこと好きなんですか？」

……ふふ。周りに人がいないのが幸い。私は振り返らずに答える。

「ええ。あの時から、私の心の中にはあの方がいますわ」

きつぱりと、わざと強い口調で言つてみた。けれど、男はもつと強い口調で言い返してきた。

「……わかりました。でも、それでも……俺はゆかりさんのことが好きです。だからこゝまでくつついてきました」

「」の男は、互いの両親が決めた私の婚約者。彼の想いは本物。私も、この男となら結婚を許してもいいと思つてゐる。けれど……いいえ、結婚したいからこそ、遠い日の恋心に決着をつけなければ。そ

のためにここまで来た。

私は何も言わず、化粧室へ向かう。さあ、あと15分しかありません。早くお化粧し直さないと。もし、万が一でも先生に会えるとしたら……そう思うとつい赤くなってしまう顔を白粉おしろいで隠さなければ。……ふふ。私は梅の花ですもの。

バッグの中からくまのぬいぐるみを取り出し、唯一、私の初恋をしつている存在に向かつて微笑む。カタン、カタンと、電車は走る。春へ向かつて……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9017d/>

---

春化粧

2010年12月24日14時23分発行